

人、歌讀まじ人とは見へず大根引 東京ゆかり子

追加

鹽野奇零

益良雄も太刀解きて屠蘇の膳
敵味方先づ打ちとけて御慶かな
凱旋に國威の高し初日影

漁夫

雨峯生

ゆうひ 夕日くまなく彩りし
 がげなが 影流しゆく鳥川
 なかかげ 長き影をば地に描き
 いへち 家路に向ふ思ひこそ
 はそ 細き煙は釣り糸の
 うきよ 浮世の波はしづかにて
 たと 例は峰の白雲の
 てきと 洞口にかへるそれなるか
 けしお 芥子生えゆきて限りなき
 むらぶみ 毛武の峰の濃紫
 きし 岸をたどれる漁夫一人
 うた 俚歌にわか身をまかせつゝ、
 げに「詩の使」歌の神
 それにも似たる生活も
 けふ 今日もくれたる樂さを
 無心ながらに湧きたちて
 無心といへどひたすらに
 このみ 眞實を結ぶ道理を

無邊天地の擴かりん

柴の破垣、妻もなき

たゞ「自然」のふところ

深き蕪なこほかん

四邊はやゝに冷雲の

しづかに岸邊さすりゆき

礙りなき身はすがくと

觀喜の光眉にみゆ

通ふ運命と思出て

我家わびしき獨住居

願ふ幸こそ天地の

今日はくれぬくれはてぬ

襲ひきたりて川水は

音も淋しくなりぬれど

あがきもはやくなりゆきて

話ふ小うたの音もやみて

雪の夕べ

胡山山人

浮世の塵をしばしだに

清めんものと久方の

天つ御空を立ち出で、

雪は下界にくだり來ぬ。

清き心を白妙の

色に見せつゝ、野邊山へ

塵のちまたもいとひなく

つもるぞ雪のまことなる。

見渡すかぎり眞白にぞ

かやきわたる銀世界

賤が伏家もたちまちに

玉の臺となりけり。

紅葉のにしき影もなく

さびぞはてたる梢をば

吾が物顔に非時くも

六つの花をば咲かしけり。

向ふに見ゆる高き丘

前を流るいさゝ川

丘はうもれて川はしも

碧玉なせる色さむし。

しばしたへなる此のさまに

みとれてよれる書^のの纏

手を拱^あめければ我が胸^{むね}に

いとくさくさの感^{あはれ}あり。

ふりつむ雪はへだてれど

貴賤貧富のそれ々に

見る人々の心こそ

千々のすがたにかはるらめ

雪にはえある黒羽織

綿あたいかく着る人は

玉の臺に酒くみて

自然の美をやめづらん。

すきを極めし床の上に

たがやす賤のいたづきも

はた織る子等がいとなみも

知らでふすまや重ぬらん。

寒さを知らぬあて人に

見せばや賤が麻ぶすま

のきもる月をしも氷る

袖にやどして寝る様を。

軒端かたむき壁やぶれ

ふせぐにかたき木枯の

うき世の風も身にぞしむ

寒さにむせぶ者もあり。

めぐる因果が世の中に

父は車のかちとりて

夏の日長も冬の夜も

足にひまなきくるしみな。

母は水仕にやつれては

日毎夜ごとに世渡りの

からきに泣くも知らずして

こま竹馬とうかれつゝ

富貴にほこる人の子の

すがたを見つゝ羨みて

われにもかくとうなる子の

せがむ心ぞいちらしき。

はぐゝむ親はありながら

うゑに泣かするみどり子の

れ入りし顔をながめても

つらきは人の世なりけり

昨日はことに紛らして

かへしやりたる市人の

今日を限りとはたらむを

如何にいひときかへすべき。

しばし浮世をよそにして

ねむらむものとまとるめば

夢のうちにもからき世の

はかなき影ぞうつりぬる。

ましてや雪の今夜など

親は子を抱き子は親に

いだかれつゝもたへかぬる

さむきふすまになきぬらん。

* * * * *

あはれたへなる六の花

浮世の塵は清めずも

飢寒になやむ世の人の

心痛ますなとこしへに。



アメリカのうらだな

朝露生

うらだなとは云へど四階立ての借家、千弗や二千

弗は銀行にあづけて置くのですが、悲しやこの國

にてはかくてもジャップの九尺二間、人なみの交

際もできず、その日その日の業務を漸く滞りなく